

《ざっざっざ……》

(雑踏を歩く音)

あばら家の立ち並ぶ貧民街の一角。

貴方は、目の前の身なりの整った服装でニコニコと笑いながら先導をしている男を忌々しげに睨み付ける。

貴方の視線に気付いているのだろうが、それを気にした様子もなく受け流し、男は歩き続けている。

そして暫く歩いた後、とある寂れた民家の前まで来てその歩みを止めた。

《こん、こん》

(戸を叩く音)

《どさっ、どさっ、バタバタバタ……ぎい》

(扉の開く音)

こん、こんと軽く男がノックをすると、家の中からバタバタとした音が聞こえてきて、慌てたように扉が扉が開く。

親父

「こ、こいつは娼館の旦那！ す、すみません、まだうちのバカが見つからないもんでして……！」

すぐに見つけて、今度は逃げ出したりしないようしっかり教え込んでから、すぐに、すぐに顔を出させますんで……！！！」

中から飛び出すように出てきたのは、先日貴方が殴った、例の中年の男……ノラの父親だ。

娼館の主

「ああ、いやいやそれは結構！ その話は解決したので、今日はその連絡にね」

親父

「は、へえ？ それはどういう……？」

娼館の主

「こちらの方が、彼女の身請けをして下さったんだよ。そら、これが約束の金だ」

《ちやり……》

（小銭の入った袋の音）

身なりの整った男——娼館の主が、ノラの父親に金の入った小さな袋を渡す。

袋は小さく、貴方が支払った額からすると随分と小額なのは明白であった。

そうと分かってはいたものの、はっきりと足元を見られていた事が分かり、思わず貴方は舌打ちしてしまうが、娼館の主が気にする様子はやはりなかった。

親父

「は？　へへえ、そいつは有難いですが、此方の方ってえと……っ！？　お、おまえ！！」

中年の男が貴方を見るなり目を見開き、驚きを露（あらわ）にする。  
貴方”からしても出来れば二度と見たくない顔ではあったが、今日ばかりは仕方がなかった。

ここで、全てを娼館の主に任せて金だけを支払わせ、なあなあの中に話を終える訳にはいかないのだから。

親父

「だ、旦那！　こ、こいつが娘を連れてくのを邪魔した男ですぜ！　なんで俺の家になんか連れてきたんでかい！！」

娼館の主

「言っただろう？　この方がお前の娘を見受けしてくれたんだよ。それと、身請けに当たってどうしてもお前さんに言いたい事があるそうなんでね。」

この方は、お前の娘の粗相の件も合わせて、随分払ってくれたんだ。お前さんはむしろ、お礼を言うべきだと思うがね？」

親父

「はあ？？　へえ……そいつは、また……へへ。」

なんだ、お前？　そういう事だったのか？　うちの娘に随分熱心だった

もんなあ？

ひひ、どうもありがとうよ！！　もう、うちの娘は可愛がったのって事か、ん？

ハハハ！　まあ、俺は酒を買う金が入れば何でもいいがねえ！

ひひ、誰かが役に立って消えてくれるってのはこんなに気分がいいものなんだなあ！　ひひひ！！」

話を聞き、少女の父親は貴方に向かって下卑た笑みを浮かべ、ヒヒと笑う。

同類を見るようなその顔が無性に腹立たしく、一緒にするなと喚きたかったが……それでは何のためにここに來たのか分からない。

殴りたくなる拳を必死に抑えながら、

貴方を嗤い、愉快気に懷に金を男が仕舞おうと下を向いた所で、するりと、冒険者として鍛えられた動きで、男に何もさせぬ内にその懷へと入り込む。

そして小袋を仕舞おうとしていたその胸倉をぐいと掴み、肺を抉るように胸に力を込めながら男を壁へと押し付けた。

《ぐっ！》

（壁に押し付ける音）

親父

「がっ！！？　ぐえ、なにしやが……ぐぶっ！」

男が悲鳴をあげ足掻こうとするが、貴方は押し込んだ手に力を込め、更に胸を圧迫させ、喋らせない。

そのまま悲鳴もあげられぬ男へとゆつくりと顔を近づけ、真正面から、見るだけで吐き気すら覚えるこの男を睨み付ける。

親父

「ぐぶ……ぐえ、……だ、だんな。た、たすけ……」

娼館の主

「おやおや、相変わらずこの辺りは騒がしいねえ」

親父

「そん、な……ぐ、ぶえっ!!??」

中年の男が助けを求め娼館の主へと手を延ばしたが、主は愉快的な見世物でも見ているかのように喉を鳴らしながら、知らぬ顔を決め込んでいる。

助けが入らぬ事を知った男は、藁（わら）に縋る（すがる）かのようなか細い声を上げたが、再び力を込め捻りあげ、顔を真正面からつき合わせる。

親父

「ぎ、ぐ……な、なんだって……んだよお。」

む、むすめを買ったんだから……俺になんかもう、用はねえ……だろお

っ!？」

貴方の怒りに煮え滾る瞳を正面から見て、男は途端に弱々しく懇願するような声をあげた。

妻に裏切られたためにこうなったのか、それとも酒に溺れたからこうなったのか。

それは貴方にも分からない。

だが、溺れたまま娘をただ金に換える手段とするまでに堕ちた男に、貴方は今、何より大事になったモノを守るため、言うべき言葉を投げかける。

【これは自分から……いや、あの娘（こ）からの手切れ金だと思え。

あの娘が自分から会わない限り、2度と、彼女の前に姿を見せるな。

彼女の近くには、いつも必ず自分がいる……もし、1度でもその姿を見掛けた時は】

【――危険に挑む冒険者の刃が、モンスターだけに迫る訳じゃないのを、身を持って教えてやる】

静かにぐつと、男の脳へと刻み込み、2度と忘れる事がないよう、そう貴方は言葉を告げた。

親父

「ひっ……うぐ、ひ……ひいっつ!!??」

胸を押さえつけられたままの男は、潰れた蛙が出すかのようにくぐもつた悲鳴を上げる。

念を押すために貴方が腕に更に力込めると、男の首が必死に上下に揺られ、空気を求め喘ぐ息が漏れ出ていく。

親父

「わ、わが……わが、った！　む、むすめには……も、ちかづか……な……ぐええっ！？」

男の目が恐怖に染まり、話を理解したと分かった所で貴方は掴んでいた手を放した。

《ばっ》

（放す音）

親父

「ひ、ひい……ひいひいひいっ！！」

《ばたっ、ばたばたばたんっ！　ぎい……！！》

（慌てて部屋へと逃げ、扉が閉まる音）

どたんつと、地面に倒れこんだ男は、そのまま哀れな程必死に家の中へと逃げ込むと、扉を閉めた。

酒の臭いが強く残る男の体臭が手に残っているようで、不快さに手を服

で拭いながら、貴方はその様子を見送った。

酒に緩んだ頭に、はつきりと理解させられただろうか？

そんな心配が湧いてきたが、もしも命の危険にあつてなお理解出来ないようならば……と、貴方が心の内で静かに覚悟を決めていると、背後から、くつくつという楽しげな笑い声が聞こえてくる。

娼館の主

「ふっ……くくっ！

いやあ、愉快的な見世物でしたね？ ふふ！

まあ、特に酷い方の娘を売る親ではありませんでしたがね？

恨まれるという事は珍しくはありませんが、くく……こういうのは珍しいものです」

狐のような笑みを浮かべたまま、娼館の主が愉快そうに嗤いつづけていた。

その親と、売られる娘を食い物にしているのは誰なんだと思ひながらも、貴方はやるべき事はやったと、主を無視して足早にこの場所を去ろうとした。

こんな気分の悪い場所には、もう一瞬だつていたくはなかったのだ。

娼館の主

「おや？ もう行かれるんですか？

まあ、貴方がしたかった事は済んだのですから当然かもしれません」



去ろうとする貴方の背に、娼館の主は声を掛ける。

だが、貴方が止まらずにそのまま去るつもりだと分かると、苦笑するよ  
うな声が一瞬間こえ、それから再び言葉を投げかけてきた。

娼館の主

「ううん、嫌われてしまいましたかね？　　はは、まあ結構ですよ、慣れ  
ていますし。

貴方は私の店の常連だったようですが、あの娘を手にしたのですから、  
もう顔を出されませんか？

それとも、また何かあつて顔を出される事になるんでしょうか？

ふふ……まあ、どちらでも構いませんが。

もしまた、ご利用される場合には……どうかご最上にお願ひ致します  
ね？」

彼の店を利用していたという事実には、一瞬“あなた”の足が止まる。

睨み付けるつもりで後ろを振り返ると、娼館の主は腰を屈め、顔には意  
外な程紳士な笑みを浮かべながら、貴方に頭を下げていた。

そのへり下った態度に、貴方は思わず怒りの矛先を逸らされたようで、  
拳の振り下ろし所を見失ってしまう。

気に入らない男ではあるが、この男がいる事で助かっている娘もいるの  
は事実だろう。

少なくとも貴方が馴染みとしていた娼婦も、その一人ではあるのだ。  
一瞬浮かんでしまったそんな考えに、自分自身腹を立てながらも、貴方

は舌打ちをし、今度こそその場を去る事にした。

少なくとも今は、もう2度とあの顔に会いたくない思いながら。

娼館の主はその様子に何も言わず、貴方の姿が見えなくなるまで、笑みを浮かべたまま頭を下げ続けるのであった。